

2023年12月4日

NPO 法人知的資源イニシアティブ (IRI) 理事
Library of the Year 2023 選考委員長
岡野 裕行

Library of the Year 2023 選考委員長コメント

通算で18回目となる Library of the Year 2023 は、2023年10月25日(水)の最終選考会をもって無事に終えることができました。選考基準に「他の図書館等にとって参考になる優れた活動」「独創的で意欲的に取り組んでいる具体的な活動事例」を表彰すると示した通り、それらの特徴を体現した図書館または図書館的活動として選ばれた7機関の関係者の皆さまには、改めて感謝と祝福の言葉を申し上げます。

Library of the Year の運営は、選考委員の顔ぶれを決めることから始まります。今年度の第一次選考会・第二次選考会においては、昨年度からの継続者も含みながら、全部で17名の選考委員の方に関わっていただきました。図書館の館種の違いや特色ある図書館的活動にも目を配れるように、分野別・世代別・ジェンダーバランスなどを考慮したさまざまな分野の専門家にお声がけをしております。Library of the Year のコンセプトにある「良い図書館を良いと言う」の理念に沿うように、今年度に新たに加わっていただいた選考委員の方々も、新しい風と新しい言葉を運んでくださいました。また、最終選考会にご登壇いただいた5名の審査員の皆さまには、それぞれの立場から「良い」という言葉を積み重ねていただきました。

そして本事業の協賛企業である株式会社内田洋行、キハラ株式会社、株式会社寿限無、富士通 Japan 株式会社の4企業の皆さまには、それぞれに賛助金のご提供、オリジナルの木製トロフィーの製作・提供、副賞となるブックトラックのご提供、運営事務局のご担当など、さまざまな形で Library of the Year 事業へのご協力をいただきました。図書館総合展運営委員会の皆さまには、最終選考会の広報や会場提供について大変お世話になりました。各社・各機関の皆さまには、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

過去3年間の最終選考会を振り返りますと、2020年と2021年は完全オンラインによる実施、そして2022年はキハラ株式会社をサテライト会場とした関係者のみの対面開催(聴衆はリアルタイムのオンライン配信)にて行ってきました。今年度の「Library of the Year 2023 最終選考会」については、コロナ禍以前のようにパシフィコ横浜に関係者も聴衆も集まったの対面開催となりました。4年ぶりに登壇者や運営関係者も含め、約100名

の方が会場に集まることができました。

今年度の第一次選考会には、選考委員による推薦と一般公募をあわせて全 44 機関が推薦されました。そこから書面審査による第一次選考会を経て、そこから 13 機関が第二次選考会へと進みました。毎年の傾向ではありますが、過去の Library of the Year でも名前が上がっていた機関が再度登場することあれば、今年になって初めて推薦されてくる機関もあり、多様な候補機関が名を連ねていたことが印象的です。Zoom を用いた第二次選考会を 2023 年 8 月 23 日（水）の 19:00 から実施し、今年度のライブラリアンシップ賞を 2 機関、優秀賞を 4 機関、合計 6 機関を選出しました。さらに第二次選考会の終了後、知的資源イニシアティブの「Library of the Year 2023 実行委員会」からの推薦として、ライブラリアンシップ賞または優秀賞を受賞した 6 機関以外から、特別賞を 1 機関選出しました。

長期的な活動を評価するライブラリアンシップ賞には、「国立国会図書館デジタルコレクション」と「東京・学校図書館スタンプラリー」の 2 機関が選ばれました。

「国立国会図書館デジタルコレクション」は、授賞理由に「長年の資料デジタル化で誰もが調査・研究に親しめる環境を実現」とあるように、2022 年末のリニューアルによって大きな話題となったデジタルコレクションの「個人向けデジタル化資料送信サービス」に注目が集まりました。調査・研究に対する社会的なインパクトや貢献度の高さは、これまでとは比べ物にならないほどの影響力を持っていると思います。第二次選考会のなかでは今年度の最多得票数となる 15 票を獲得しての受賞決定となりますので、多くの選考委員から高い評価を得ていたことがわかります。なお、国立国会図書館が提供するウェブサービスとしては、2017 年に「国立国会図書館レファレンス協同データベース事業とその参加館および協力者」として受賞機関となったことがありますので、今回はそれに続いての受賞となります。図書館業界に留まらない社会的インパクトのある事業を、国立国会図書館はさまざまな形で実現していることがわかります。

また、「東京・学校図書館スタンプラリー」については、授賞理由に「世間に注目されにくい学校図書館を、より多くの人に知ってもらう活動であり、その理解を深める役割を果たしている」とあるように、学校図書館の取り組みを広く知らしめる継続的な活動が高く評価されました。公式ウェブサイトに掲載されているチラシを確認すれば、多くの学校図書館が公開校として参加していることが分かります。各学校図書館における見学ツアーの実施レポートも充実しており、学校図書館の広報活動やイベント活動のあり方を考える上で、ほかの図書館でも参考となるところが大きい取り組みでしょう。

優秀賞を受賞したのは、「高知こどもの図書館」「雑誌『ライブラリー・リソース・ガイド』(LRG)」「東京学芸大学附属図書館と Explayground 推進機構 MOL」「みんなの図書館さんかく」の 4 機関となりました。これら 4 機関についての講評は、最終選考会の記録

と併せて後述します。

ライブラリアンシップ賞や優秀賞を受賞した6機関以外で、第二次選考会での議論の対象となっていた7機関を対象として、「Library of the Year 2023 実行委員会」が特別賞として「都道府県立図書館サミット」を選出しました。授賞理由に「都道府県立図書館の現状と将来像を集約し、再定置することを目的としている」とあるように、都道府県立図書館の抱えるさまざまな課題について議論し、図書館そのものの有り様を考えていく機会として継続的な活動を行っていることが評価されました。2016年から3年ごとに実施しており、この先も新たな課題に向き合っていくことが期待されます。

最終選考会の審査員5名については、「Library of the Year 2023 実行委員会」にて人選を行っています。人選のバランスについては毎年のように悩むところが多いのですが、今年度も「多様な分野から選ぶ」「世代間のバランスを考慮する」「ジェンダーバランスを考慮する」「少なくとも1名はライブラリアンを含める」という条件を強く念頭に置きました。あらかじめ「審査員の多様性を考慮する」という条件を設けているため、ある人物を審査員の候補者として選び出すと、その方と同じ世代や職種に該当する別の候補者を選べなくなります。また、お願いするにあたっては候補者のスケジュールも考慮しなければならないため、実際に審査員を打診してみないことには顔ぶれを確定しづらいものとなります。毎年複数名の候補者のお名前を上げて検討していますが、登壇の打診は順次行うこととなりますので、審査員をお一人ずつ確定していくたびにほかの候補者の選択肢は徐々に狭まってきます。最後の5人目の候補者に依頼をかける際には、分野・世代・性別などがほぼ限定されてきます。パズルのピースを当てはめるように、今年度の最終選考会を評価していただくにふさわしい審査員の顔ぶれを確定させていきます。

『ネット情報におぼれない学び方』の著作を持つ中央大学職員の梅澤貴典さんには情報リテラシー教育と学びの観点から、『図書館のための災害復興法学入門』の著作を持つ岡本正さんには弁護士の立場から、川の図書館の館長・熊谷沙羅さんにはまちづくりやティーンズの立場から、山梨英和大学人間文化学部助教の河本穂馨さんには図書館情報学の研究者の立場から、みんなの森 ぎふメディアコスモス プロデューサーの吉成信夫さんには昨年度の大賞受賞機関の代表者の立場からのコメントを期待し、審査員のお役目をお願いしました。

なお、審査員の皆さまには、事前に「自らの審査のポイント／評価基準はどのようなものか」「その基準を今回の優秀賞受賞機関に照らし合わせた場合、どのような良い点やおもしろいと思える特徴が見えたのか」を言語化していただくようお願いしました。Library of the Year という賞の特徴は、「良い図書館を良いと言う」という選考プロセスをさまざまな立場の人たちによって積み重ねていくことにあります。選考委員会としては既に授賞理由としてまとめたものを最終選考会に先立って公開済みですが、5名の審査員の皆さまにも改めてそれぞれの立場からの言語化をお願いすることになります。今年度の審査員の皆さま

まも、こちらの期待していた以上にそれぞれの立場から表現していただくことができたのではないかと思います。

以下に審査員5名の皆さまが語ってくださった「評価のポイント／評価基準」の要点をお示しします。

●梅澤貴典さん

人々が新たなアイデアを生み出し、次の行動に踏み出すきっかけを得られる場所になっているか。学びによる成長や課題解決の力を身につけられるか。

●岡本正さん

異分野の知識と知識の融合を促すような場所になっているか。分野を超えた知の融合により、新たな視点が生み出されるような機能を持っているか。

●河本毬馨さん

そこで行われる取り組みがほかの地域にも適用可能な場所としての広がりがあるか。今後の活動がさらに良くなっていくような発展性を感じられるか。

●熊谷沙羅さん

本を活動の中心に置くことで、人々のつながりやワクワク感をつくり出しているか。その場所においても大丈夫と感じられ、安心して過ごすことができるか。

●吉成信夫さん

「共創」と「共振」の機能が揃うことで、そこでの取り組みが他者に波動として伝わるか。人と人との関係の深いところで振動や揺れが他者へと伝わっているか。

以上の評価基準にしたがい、優秀賞4機関に点数をつけていただきました。過去2年間と同様に、今年度の最終選考会も「審査員全員がすべての優秀賞受賞機関に順位をつける」（1位機関に4点、2位機関に3点、3位機関に2点、4位機関に1点）という審査方法となります。5名の審査員の合計点数をもとに評価することになるため、最高得点が20点／最低得点が5点ということになります。

以上の基準で得点を集計してみたところ、大賞受賞機関は合計で17点を獲得した「みんなの図書館さんかく」に決定しました。獲得した17点の内訳を公表しますと、【4点・4点・4点・3点・2点】となります。3名の審査員から1位票の4点を獲得しており、納得できる結果かと思います。それでも3位票の2点を入れた審査員も1名含まれておりますので、大賞受賞機関であっても「満場一致で高い評価を獲得する」のは大変難しいことが分かります。審査員の分野・世代・ジェンダーバランスなどに多様性を持たせることは、最終選考会の審査を行うに際してはやはり大事なポイントであると感じます。

参考までに他機関の得点についても公表します。昨年同様に、2位以下については機関名と一致しないように、A機関・B機関・C機関と表記します。これは「優秀賞を取った

時点で4機関すべてが素晴らしい活動をしている」ことを強調したためであり、大賞受賞機関のみが突出した印象になってしまうことを避けたいためです。最終選考会は優秀賞4機関に順位をつけることが目的ではありません。便宜的に点数をつけて大賞を選びましたが、「優秀賞4機関の取り組みに大きな差はない」というのが私たち主催者側の見解であるためです。

A機関：16点 内訳は【4点・4点・3点・3点・2点】

B機関：10点 内訳は【3点・3点・2点・1点・1点】

C機関：7点 内訳は【2点・2点・1点・1点・1点】

2位のA機関は16点を獲得しました。大賞を受賞した「みんなの図書館さんかく」とはわずかに1点差となります。1位票も2票入っていますので、A機関も審査員から十分高い評価を得ていたものと考えられます。3位票が1票というのも「みんなの図書館さんかく」と同じですので、最後の1票のところで1位票を取ったか2位票を取ったかというわずかな違いとなります。最終的な結果が入れ替わっていてもおかしくないような僅差でしたので、惜しいところではありましたが、今回に関してはそのもう一歩先に「みんなの図書館さんかく」が到達したということでしょう。

B機関とC機関には3位票と4位票が集中しましたが、2位票を2票獲得していたB機関が少しだけ頭を抜け出した結果となります。とはいえ、審査員討論会も舞台裏でも審査員の皆さまはだいぶ悩まれている様子でしたので、前述した5名の審査員の顔ぶれが揃ったこと、そしてあの日あの時点で判断された結果がこのような並びになったということにすぎません。大賞受賞機関を選ぶために便宜的に点数を付けていただきましたが、4機関ともに素晴らしい活動をしていた事実は揺らぐことはありません。大賞という称号は「敢えて1機関を選ぶなら」というものであり、表彰された機関はいずれも今年のLibrary of the Year 2023を代表する活動ばかりです。

優秀賞を受賞した「高知こどもの図書館」は、授賞理由として「民間公共」と「行けなくても訪ねられる図書館」が強調されました。プレゼンのなかでも紹介されていたように、クラウドファンディングの活用によって資金を集め、こども向けウェブサイトを活用したアクセシビリティを意識した「一緒に作り、育てる」ウェブサイト」を構築するなど、「こどもに本をとどけつづけること」の具体的な方法を考え続ける姿勢は優秀賞にふさわしい取り組みでしょう。昨年のLibrary of the Year 2022でも第二次選考会に名前が残っていた機関ですが、改めて今年度にも推薦されたことで優秀賞受賞という結果になりました。

同じく優秀賞の「雑誌『ライブラリー・リソース・ガイド』(LRG)」は、授賞理由のとおりに「革新的・多角的なテーマで図書館の未来を考える言論空間を提供」している点が評価されました。プレゼンテーションでは「独立した雑誌」「長編の論考」「妥当な原稿料」

「ライブラリージャーナリストの育成」「読者コミュニティ」など、今日の図書館業界を支える言論空間の根幹を支える編集思想を垣間見ることができました。なお、選考委員の一人でもある岡本真氏は『ライブラリー・リソース・ガイド』の編集発行人として当事者に該当するため、今回の第一次選考会・第二次選考会の選考過程における討論からはいずれも退席していただいております。あくまでも岡本氏以外の選考委員から推薦されたものであり、選考過程においても岡本氏を除く 16 名で議論した上で授賞を決定したことを申し添えます。

優秀賞のもう 1 機関は「東京学芸大学附属図書館と Explayground 推進機構 MOL」となりました。プレゼンのなかで、「未来志向」「スピード感」「多様性」という三つの特徴や「遊び心」「挑戦」などのキーワードとともに、「デジタル書架ギャラリー」「デジタルアーカイブの活用」「学芸本ガチャ！」などの実際の取り組みが紹介されていました。授賞理由にある「デジタル社会の教育を支える「知の循環」の再構築の追求」がさまざまな工夫によって実現されていることがわかります。なお、東京学芸大学としては 2016 年に「東京学芸大学 学校図書館運営専門委員会」として優秀賞・オーディエンス賞を受賞しておりましたが、それに続く受賞となります。大学図書館はどうしても学内関係者に利用者が限られてしまう傾向にあるため、過去の Library of the Year を振り返ってみてもその受賞事例はそれほど多くありません（このほかには 2010 年の「神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ事業」と 2022 年の「千葉大学アカデミック・リンク・センター／附属図書館」の事例のみ）。大学図書館の活動が受賞したという点も特筆できるでしょう。

そして今年度のオーディエンス賞と大賞をダブル受賞したのは「みんなの図書館さんかく」となりました。授賞理由にある「誰もが主人公として社会に参画し、共にまちを育てていく活動拠点」という点が高く評価されました。プレゼンテーションをされた館長の土肥さんは、「みんとしよは図書館ではない」「図書館という仮面を被ったコミュニティスペース」と強調されており、そういう立ち位置であることを自覚されながら、むしろそうであるがゆえに「みんとしよの活動をきっかけに新しい図書館像・社会像をともに描きたい」と話されておりました。これはまさに Library of the Year という仕組みが評価したかった活動であると感じますし、会場にいらっしゃった聴衆のみなさまと 5 名の審査員によって選ばれた結果も十分な説得力があると思います。「なぜみんとしよをつくったのか」という個人的な背景から語り始める土肥さんのプレゼンテーションは聞き手の心に響くものであり、開館から 3 年半というこのタイミングでの受賞は、今後さらなる発展が期待できるという点でも大変に喜ばしい結果になったと思います。

最後になりますが、会場投票によって実施したオーディエンス賞の票数の内訳もご報告します。有効票数は 53 票で、「みんなの図書館さんかく」はそのうちの 24 票を獲得しました。それに続き、A 機関が 19 票、B 機関が 5 票、C 機関が 5 票となります（前述した大賞の報告と同様に 2 位以下の機関名は記号に置き換えます）。大賞と同じく、オーディエ

ンス賞の結果も「みんなの図書館さんかく」とA機関は僅差でした。すべての優秀賞受賞機関に得点を配分する審査員の投票とは異なり、オーディエンス賞の投票はお一人につき1票となりますので、会場にお越しの皆さまも投票先をだいぶ悩まれたのではないかと思います。

2023年6月から10月までの5か月間にわたって実施してきた今年度のLibrary of the Year 2023の事業も無事に終わることができました。すべての関係者を代表して改めてお礼を申し上げます。

ウェブフォームからたくさんの推薦機関の情報を寄せてくださった全国各地の皆さま、ありがとうございました。例年の選考よりも比較検討できる推薦機関が多かったのも、充実した議論につなげることができたと思います。

第一次選考会と第二次選考会において、多くのコメントを寄せて議論してくださった17名の選考委員の皆さま、ありがとうございました。ほかの選考委員の方々の意見を真摯に受け止める。その上で自分の評価や判断を信じる。候補機関に対するそれぞれの思いが込められた言葉が飛び交い、皆さまと段階を追って議論を深めていく過程はとても大変でしたが楽しい時間でもありました。また、受賞機関を決定してからも、短期間のうちに授賞理由のご執筆もいただいたことに感謝申し上げます。

最終選考会へのご登壇を快くお引き受けくださった5名の審査員の皆さま、ありがとうございました。最終選考会は毎年のLibrary of the Yearのなかでもっとも注目が集まる時間になります。事前準備のご負担も大きいと思いますし、審査員として発する言葉の一つひとつに責任を感じてしまう役回りかと思えます。選ばれた優秀賞受賞機関のどこが「良い」のか、審査員として何が「良い」と思ったのか、責任感をともなった鋭くも暖かい言葉として会場に響き渡った皆さまの評価は、次の時代の図書館のあり方を導くヒントに溢れていたと思います。

最終選考会でプレゼンテーションをしてくださった各受賞機関の皆さま、ありがとうございました。Library of the Yearは知的資源イニシアティブ(IRI)が一方向的に授与している賞ではありますが、各受賞機関の皆さまが快く賞を受け取っていただき、受賞コメントのなかで喜びの声をお聞かせいただけることは何よりの励みになります。

開催資金や正賞・副賞のほか、運営のあらゆる場面でお力添えをいただいた協賛企業の皆さま、ありがとうございました。Library of the Yearの仕組みを突き動かしているのは「他の図書館等の参考となる先進的な取り組み」を言語化しようとする思いによるものですが、現実的にその運営を資金面から支えてくださる皆さまのお力添えがあってこそイベントとして成り立たせることができます。

最終選考会の運営を担ってくださったボランティアスタッフの皆さま、ありがとうございました。今年度の最終選考会は4年ぶりの対面開催となりましたが、多くの関係者・参加者の誘導や進行がスムーズに行えたことに改めて感謝申し上げます。

最終選考会の会場をご提供くださるとともに、ウェブやメルマガでのイベント告知にご協力いただいた図書館総合展運営委員会の皆さま、ありがとうございました。毎年のように安定した形で Library of the Year が実施できているのは、図書館総合展のフォーラムの一つに加えていただけていることが大きいと思います。最終選考会に注目が集まるようにご配慮いただいていることには感謝の言葉しかありません。

そして最終選考会の会場に足を運んでくださった多くの参加者の皆さま、ありがとうございました。会場で各受賞機関のプレゼンテーションや審査員討論会をご観覧いただき、オーディエンス賞の選考にご投票をお願いすることも「Library of the Year 最終選考会」の重要な過程となります。ご来場して票を投じてくださった皆さまのおかげで、最終選考会の結果がさらに盛り上がったと思います。

今年度もさまざまな人たちのお力添えで Library of the Year 2023 を開催することができました。この場をお借りして皆さまに感謝の言葉を申し上げます。

来年度も 19 回目となる Library of the Year 2024 を開催する予定です。Library of the Year の掲げる「良い図書館を良いと言う」の理念にもとづき、また皆さまとともに新たな受賞機関の活動に注目し、新しい時代の取り組みを表彰できればと思っております。次の時代の「良い」活動が何になるのかはまだわかりませんが、引き続き当事業に対してご協力・ご支援をいただければ幸いです。

受賞機関コメント

【Library of the Year 2023 ライブラリアンシップ賞】

■国立国会図書館デジタルコレクション

この度は、Library of the Year のライブラリアンシップ賞に国立国会図書館デジタルコレクションをご選定いただきましたことにつき、御礼申し上げます。

当館は、試行的なデジタル化を経て、2000 年度から資料のデジタル化を本格的に開始し、2023 年 8 月末時点で約 356 万点の資料の画像を国立国会図書館デジタルコレクションで提供しております。その間、画像は二値と呼ばれる白黒から、グレー、カラーへと変化し、スキャン解像度も高くなりました。提供方法は、当館内のみ又は一部をインターネットで提供するサービスに加え、2014 年には図書館向け送信サービス、2022 年には個人向け送信サービスへと拡大しました。さらに、AI を用いた OCR 処理技術の進展により全文テキスト化も進み、247 万点の資料が全文検索可能となっています。近年では、2021 年から 2025 年までの 5 年間で「国立国会図書館のデジタルシフト」推進期間と位置付け、情報資源と様々な知的活動を的確につなげていくため、「資料デジタル化の加速」を含めた事業に重点的に取り組んでおります。

当館のデジタル化事業は、出版者・著作権者のご理解、ご協力はもちろんのこと、デジタル化作業を受託しておられる企業の方々、実際のデジタル化作業を丁寧に担当して下さっておられるの方々、図書館向け送信サービスの参加館を含むご利用をいただいているの方々など、多くの方々のご協力、ご尽力により実現しております。さらに、近年では、当館以外の機関がデジタル化された資料も収録しており、ご協力いただいている方々の範囲は拡大しております。この場を借りて御礼申し上げます。

今回の受賞を励みに、当館は、関係する皆さまのご理解、ご協力を賜りながら、これからもデジタル化事業を推進して参ります。国立国会図書館デジタルコレクションが、文化・創作・研究の発展の一助になれば幸いです。どうもありがとうございました。

国立国会図書館

【Library of the Year 2023 ライブラリアンシップ賞】

■東京・学校図書館スタンプラリー

この度は、「Library of the Year 2023 ライブラリアンシップ賞」に選んでいただきましてありがとうございます。また、これまでの本会の活動に参加・支援をしてくださったすべてのみなさまに深く感謝を申し上げます。

「東京・学校図書館スタンプラリー」は学校図書館を多くの方に知ってもらうことを目的に、2012年に都立・私立の高校13校で始まりました。児童生徒が夏休みとなる7月中旬から8月末の開催期間中に参加校の学校図書館を一般に公開し、館内を自由に見学してもらうイベントです。特色ある学校図書館を知ることができる貴重な機会として、小中高生や図書館関係者をはじめとした多くの方々にご参加いただいております。イベントの参加校と参加者も回を重ねるごとに増え、2023年には累計で参加校232校、参加者が8,744名に達しました。国立・都立・私立という設置者の垣根を越えて学校司書が連携をしていることが、他に例を見ない本イベントの特色となっています。

単に学校図書館を公開するだけでなく、2冊の『学校図書館の司書が選ぶ小中高生におすすめする本』（ぺりかん社）の出版をしたり、作家をお招きした講演会も開催したりするなど、学校図書館の魅力をさらに広く知ってもらうための取り組みを行ってきました。

2020年から始まった新型コロナのパンデミックはイベントの存亡に関わる危機となりました。そのような時でもオンラインを活用した新たな取り組みを行うなど、歩みを止めずにできることを続けてきました。

このような本会の11年におよぶ取り組みをご評価いただき、今回「国立国会図書館デジタルコレクション」と並んで受賞することができたことは、学校司書として誇らしい思いでいっぱいです。

「東京・学校図書館スタンプラリー」の運営にはまだまだ課題が多くあり、継続していくことは容易ではありません。ですが、学校図書館法制定70周年となる2023年に受賞できたことの意味はとて大きいと感じています。今回の受賞を励みにして学校図書館の裾野を広げる取り組みを続けていきたいと思っております。

この度は誠にありがとうございました。

東京・学校図書館スタンプラリー

【Library of the Year 2023 優秀賞・大賞・オーディエンス賞】

■みんなの図書館さんかく

この度は、「Library of the Year 2023」の大賞およびオーディエンス賞をいただき、誠にありがとうございます。

みんなの図書館さんかくが開館した当初は、「図書館」と称したことで、図書の仕事に関わる皆さまから「それは図書館ではない」と、お叱りをいただくことがありました。それから様々な図書館に関わる方々と出会い、対話を重ねるなかで、図書館が本来持っている機能の深さや広さを知ることができました。

そして、開館から3年半が経過したいま、私たちはやはり「図書館」と名乗りたいと思います。

私はどちらかというと、まちづくりの畑からやってきた人間で、図書館には専門性を持っていません。しかし、本のある空間に大きな可能性を感じており、何よりも本好きのひとりです。そんな人間だからこそ、「さんかく」という空間を生み出すことができたし、全国60以上に姉妹館が広がるムーブメントになったと考えています。

「さんかく」あるいは「みんとしょ」の実践は、図書をより身近に感じるだけでなく、その空間に関わる多くの人々にとって図書館を自分ごとと感じられる仕組みです。

人口減・税収減の社会では、市民一人一人がオーナーシップを持って、社会に参画し、自治の主体となることが重要だと考えています。その意味で、さんかくは図書空間としての機能を超え、公共への新たな関わりしろを見出したとも自負しています。

今回の受賞は、その意味で私たちの実践の背中を強く押してくださったような気持ちもあって、本当に喜ばしいことだと感じています。日頃からさんかくに本棚オーナーとして参画くださっているみなさんをはじめ、全国の姉妹館、みんとしょと関わるすべての方と一緒にこの受賞を分かち合いたいと思います。

改めまして、本当にありがとうございました。

みんなの図書館さんかく 館長 土肥 潤也

【Library of the Year 2023 優秀賞】

■高知こどもの図書館

この度は、Library of the Year 2023 において優秀賞を賜り、誠にありがとうございます。当館の活動に目を留めて光をあててくださいました、ご推薦と選出いただいた審査員の皆さま、そしてこれまでに当館にご支援・ご協力くださったすべての皆さまに心より御礼と感謝を申し上げます。

高知こどもの図書館は、日本初のNPOが運営するこどもの本専門図書館として1999年12月に開館し、2020年4月に高知県立公文書館内に移転しました。高知城のお濠の中にある、緑に囲まれた立地にあります。おかげさまで今年12月に開館25年目を迎えます。

「こどもに本をとどけつづけること」という理念のもとに、こどもたちに本から広がる世界をわかりやすくふさわしい言葉で伝える本の選書に努め提供しています。県から施設の提供をうけ当館の趣旨に賛同してくださった会員からの会費や寄付などの自主財源で運営しており、理事・スタッフ・ボランティアと協働しています。

今回の受賞理由となった取り組みとして、2020年の施設移転と2022年のウェブリニューアルにより、高知市の図書館を訪ねる、図書館が県内各地を訪ねる、ウェブで図書館を訪ねるという3スタイルを確立、との評価をいただきました。

2020年の新館移転時、これまで当館が継続して活動していた「利用者が図書館を訪ねる」と「図書館から本を持って県内各地を訪ねる」ことがコロナ禍により休止を余儀なくされました。わたしたちが今できることを検討し、非来館者向けこどもの読書支援サービスの拡充が必要であると考え、2021年『行けなくても訪ねられる図書館』当館Webサイトリニューアルのクラウドファンディングを実行しました。プロジェクトに対してネクストゴールを上回るご支援をいただき、2022年5月5日こどもの日に新Webサイトを公開しました。アクセシビリティに力を入れたサイト構成となっており、GIGAスクール構想に対応したタブレットファーストやこどもが楽しく本を選べるコンテンツなども盛り込まれています。

これからもご支援くださる皆さまと共に「また訪ねたい図書館」になるよう、歩みを続けてまいります。

最後になりましたが、Library of the Yearの益々のご発展をお祈り申し上げます。

認定NPO法人 高知こどもの図書館 一同

【Library of the Year 2023 優秀賞】

■雑誌『ライブラリー・リソース・ガイド』（LRG）

編集兼発行人の岡本真は Library of the Year に長年関わっています。公平性の観点から当然、LRG への授賞には関与していませんが、それでも受賞側に回る難しさを感じています。ですが、受賞辞退は避けるべきと考え、ありがたく受賞することにしました。もし、辞退すればそれが前例となり、岡本と同じく民間事業者の立場にある方に選考委員をお願いしにくくなるからです。この論点に関心をおもちの方はぜひ第 37 号に岡本が書いた手記をご一読ください。

さて、LRG は創刊 11 周年となります。この間、多様なテーマを扱ってきました。アドボカシー、都道府県立図書館、ファンドレイジング、離島、Library of the Year、デザイン、コミュニティ、民間公共、条例、戦争、公園等……。異分野の書き手を迎えつつ、ライブラリアンが長大な論考も寄せられるように努めてきました。重視してきたのは、次の 5 点の実現です。1. 機関誌ではない独立した雑誌、2. 業界の他誌では実現できていない長編の論考、3. 妥当な原稿料等の支払い、4. ライブラリージャーナリストの育成、5. 1000 部を買い支える読者コミュニティ。この 5 点の実現には、歴代の社内外の担当者、執筆者、購読者、購読機関が大きく貢献しており、今回の受賞者として讃えられるべきでしょう。心からの敬意と感謝を捧げます。

LRG はビジネスですが、せつかくの機会なので経営事情を少しだけ明かします。「図書館を社会に生かす」というアジェンダセッティングを試みるメディアを志向してきました。このメディアを持続していくためのコミュニティ、露骨に言えば食わせていくコミュニティの存在が欠かせません。1 回の発行にかかる費用は約 200 万円。年間総計 800 万円超です。LRG に限らず、必要とするメディアをどう食わせていくのかは、図書館業界が避けて通れないテーマでしょう。これからも年 4 回の発行の都度、750 部が定期購読されているような必要とされて持続できるメディアの確立に努力していきます。

岡本 真

【Library of the Year 2023 優秀賞】

■東京学芸大学附属図書館と Explayground 推進機構 MOL

この度は、Library of the Year 2023 優秀賞をいただきまして、誠にありがとうございます。大学図書館が受賞するということがあまり多くない中、今回優秀賞をいただくことができ、非常に嬉しく思っております。

東京学芸大学附属図書館は、国立の教育系大学の図書館として教育分野の資料を多く所蔵している図書館です。本学では民間企業 Mistletoe Japan とともに「東京学芸大 Explayground 推進機構」という協働事業を行っており、「遊び」を通じて新しい「学び」をつくることを目的に様々な「ラボ」が活動しています。当館でも、図書館と知の未来を考える「Möbius Open Library (メビウス・オープン・ライブラリー)」(略称：MOL) という活動をしています。

MOLでは、「知の循環」について考えながら「面白そうなら、とりあえずやってみよう！」というスタンスで、様々な取り組みを行ってきました。その中でも特に評価をいただいた取り組みとして「デジタル書架ギャラリー」があります。書架画像を Web 上で公開し、オンライン上でブラウジングができるようにした取り組みです。コロナの影響で、気軽に図書館に来て書架を眺めながら本を探ることができなくなってしまったことを受け、「オンライン上でも図書館という「場」を感じてもらうことはできないか？」と思い、実施したものに なります。ありがたいことに学内外問わず多くの反響をいただきました。

利用者が求めていることに対してスピーディーに対応できるという点がラボ活動の良い点の1つだと思っています。また、MOLでは、若手もベテランも関係なくアイデアを出し合えます。上下の壁がないからこそ、若手も臆することなく自由に楽しみながら活動し、そして未来につながる経験となっていると実感しています。

これからも、皆さんに「なにそれ！面白い！」と思ってもらえるような取り組みをし、その裏に「知の循環」の再構築という理念を持っていたいと思います。

この度は誠にありがとうございました。

東京学芸大学附属図書館と Explayground 推進機構 MOL 一同

【Library of the Year 2023 特別賞】

■都道府県立図書館サミット

この度は、Library of the Year 2023 特別賞をいただき、本当にありがとうございます。都道府県立図書館サミットをともに作り上げてきた全国の仲間たちと受賞の喜びを分かち合うとともに、サミットに参加して下さった多くの皆様に心から感謝申し上げます。

さて、都道府県立図書館サミットは、これまで2016（塩尻市）、2019（長野市）、2022（鳥取市）の3回を開催し、各回とも熱のこもった議論が交わされました。回を重ねるごとに全国各地から参加者が増え、また運営にも新たなメンバーが次々に参画し、議論の場・学びの場として成長を続けています。

都道府県立図書館は、都道府県民全体により良い図書館サービスを提供するため、館種を超えたあらゆる図書館をつなぐことを大きな任務としています。そのため、常にどんな課題も「自分ごと」としてとらえる意識を大切にします。多種多様な立場を互いに尊重し、受け入れ、課題意識を共有しながら協働して作り上げるサミットは、まさにこのマインドを出発点としています。また、サミット実行委員会の強みは、一人ひとりが高い自主性と好奇心を持ち、広く連携を求める「オーナーシップ」を持った有志であることです。「自分ごと」と「オーナーシップ」、この2つこそサミットの原動力であり、明日の図書館を創っていくライブラリアンに大切なマインドだと信じています。こうした点を評価いただけたことは、大変うれしく思います。

都道府県立図書館を考えることは、すべての図書館を考えることでもあります。関心のある方はぜひ、次のサミットにぜひ参加してください。開催地も募集しています。みんなで一緒に作り上げていきましょう。また、今回の受賞は都道府県立図書館サミットの今後に向けたエールだと受け止めています。これを契機に、サミットをより多くの人が、集い、語り、社会を動かすプロジェクトとして発展させていくことを新たに決意して、受賞の挨拶に代えさせていただきます。

都道府県立図書館サミット実行委員会プログラム委員
市村 晃一郎、小澤 多美子、丸山 直也